

研究事業名：外国籍母子の北九州市内の産婦人科受診時における現状調査

研究者：田中 健太郎、荒木 俊介、楠原 浩一（産業医科大学 小児科）

【要旨】

〈目的〉本邦への外国人居住者は増加傾向であり、妊娠・出産・育児を本邦で行う患者も多い。周産期の受診、特に妊婦健診や分娩時の入院においては、詳細な問診、説明などが必要である。外国人診療において、医療機関、患者側とも問題点を抱えている可能性があると考え、今回は医療機関側の実態を調査した。必要な言語コミュニケーションサービス及び支援を明らかにし、外国籍の母子も暮らしやすい地域作りを目指す。

〈方法〉北九州市内の分娩取扱い施設 21 施設（産婦人科クリニック 14 施設、総合病院 7 施設）を対象にアンケート調査を行った。

〈結果〉参加の同意、すなわち回答が 19 施設で得られた。すべての施設で外来での外国人診療が行われ、年間 10 人以下の施設が最多だった。診療経験のある外国人患者の主言語は、ベトナム語、中国語が最多で、英語が続いた。17 施設で外国人診療の際に困ったことがあると回答された。困った内容としては、言語コミュニケーションの問題が最多で、文化や習慣のことで、日本の医療システムを知らないが続いた。産科診療で困った内容としては、問診や説明などの際の言語コミュニケーションの問題が最多で、分娩様式の決定が続いた。医療通訳者を配置している施設が 4 施設あり、3 施設が派遣通訳、1 施設が電話通訳だった。外国人診療で実際にしている工夫として、自動翻訳機やアプリケーションの利用が最多で、身振り手振りや筆談での対応、通訳可能な知人やボランティアの同伴などの工夫がされていた。診療でコミュニケーションが困難と感じる言語は様々であったが、ベトナム語、中国語が最多だった。あれば利用したい言語コミュニケーションサービスとしては、自動翻訳機やアプリケーションの利用が最多で、医療通訳者の利用が続いた。COVID-19 関係で外国人診療の際に困ったことがあったと 3 施設が回答され、内容は入院時の PCR 検査についての説明、発熱時の対応についての説明、陽性発覚後の保健所とのやりとりだった。

〈考察・結論〉外国人診療において、多くの施設で診療に困ったことがあるという事実がわかった。北九州市の産婦人科患者では、ベトナム語、英語、中国語を主言語とする患者が多かった。診療において、言語コミュニケーションで最も困ることが多く、特にベトナム語、中国語の言語コミュニケーションが困難であると回答した施設が多かった。医療通訳者を配置している施設は 4 施設と少なかった。よりよい外国人診療のために、医療通訳者の利用、自動翻訳機やアプリケーションの使用などのサポート体制を作ることが望まれる。

【緒言】（目的・意義）

本邦への外国人居住者は増加傾向で、2014 年には全出生数のうち 3.4%は両親または片方の

親が外国人であったと報告されている。北九州市においても同様の傾向であると推測され、英語圏以外の外国人の割合も多く、産婦人科受診の際に患者側、医療機関側とも問題点を抱えている可能性があると考えた。またコロナウイルス流行禍において、外国籍コミュニティは様々な面で困難な局面に陥っている可能性があると考えた。

本研究は、産婦人科受診をする

- ・北九州市における外国人患者の母国語として何が多いか

外国人の診療の際に、

- ・医療機関側が困っていること
- ・産科特有の診療で困っていること
- ・あればいいと思う理想のコミュニケーションサービス

に焦点をあてたアンケート調査である。

本調査結果により、外国人診療における問題点を明らかにし、必要なコミュニケーションサービスを明らかにすることで、今後の産科診療、健診などにおいて、患者および医療機関がストレスなく円滑な受診ができる体制を作ることに寄与できればと思いアンケート調査を実施した。

【方法】

北九州市内の分娩取扱い施設 21 施設（産婦人科クリニック 14 施設、総合病院 7 施設）に、依頼文書、アンケートを届けた。調査協力への承諾、すなわち回答が得られた 19 施設の代表医師により、無記名自記式質問紙調査を実施した。

質問紙は、外来/入院において外国人診療を行っているか、1年間の外来/入院における外国人診療の経験数、診療患者の主言語、外国人診療で困ったことがあるか、一般的に困ったことは何か、産科診療特有の困ったことは何か、医療通訳者を配置しているか、配置しているならばその種類は何か、外国人診療においてしている工夫は何か、言語コミュニケーションが困難と感じる言語は何か、あれば利用したい言語コミュニケーションサービスは何か、コロナウイルス禍で困ったことがあったか、ある場合にどのような点で困ったか、の 15 項目を調査した。

アンケートによって得られた結果を、単純集計を行い、度数分布を円グラフや棒グラフで結果を視覚化した。

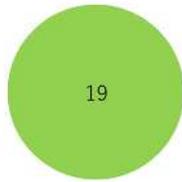
倫理的配慮として、本研究は産業医科大学研究倫理委員会の承認を得た。

アンケート結果は匿名での集計とし、個人の施設が特定されないように配慮した。

【結果】

19施設
より回答

外国人診療
外来



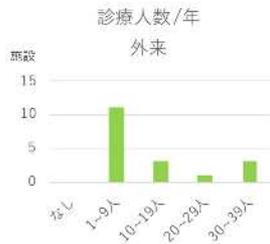
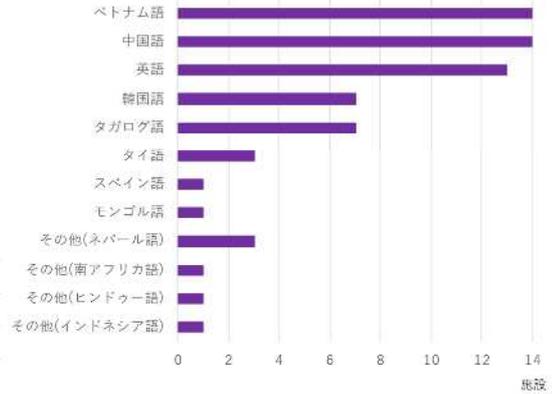
■行っている ■行っていない

外国人診療
入院



■行っている ■行っていない

患者の主言語

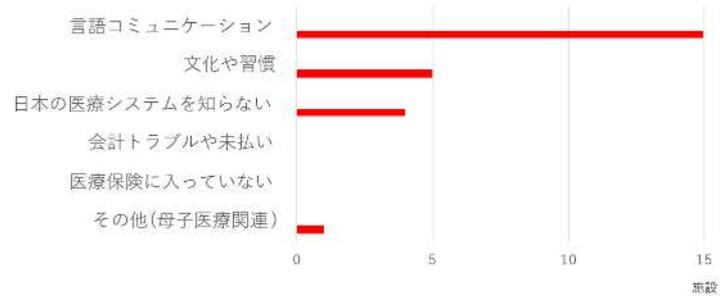


外国人診療で困ったこと

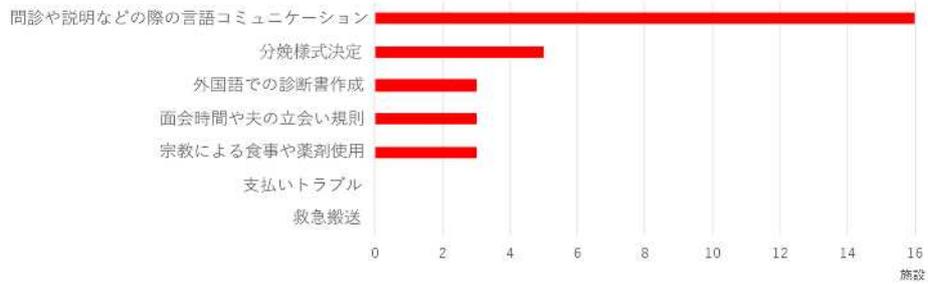


■ある ■ない

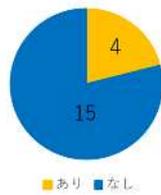
どのような点で最も困りましたか



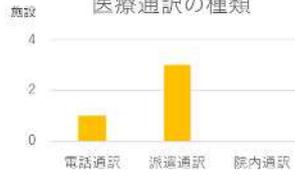
産科診療ではどのようなことで困りましたか



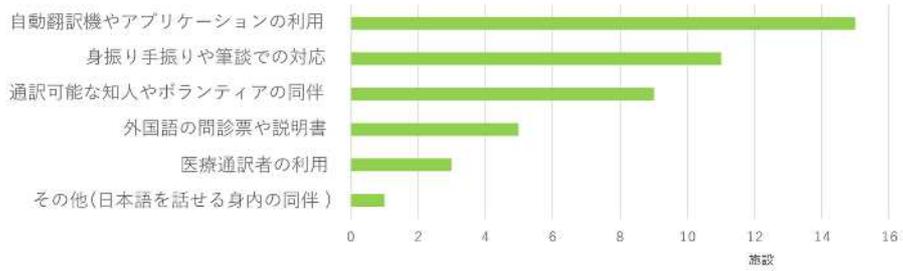
医療通訳者の配置



医療通訳の種類

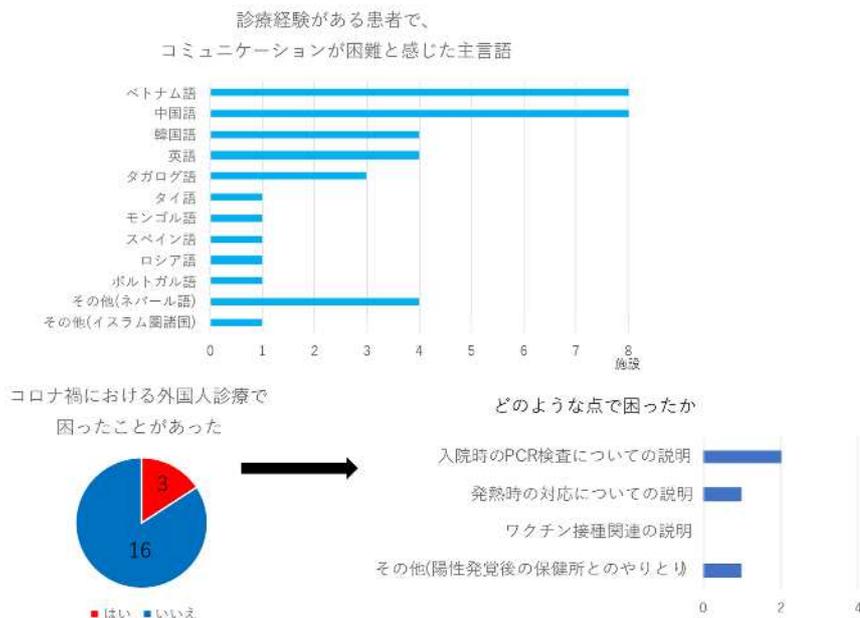


言語コミュニケーションについて、している工夫



あれば利用したい言語コミュニケーションサービス





【考察・結論】

法務省在留外国人統計によれば、2021年12月末現在の外国人登録者数は276万人で、増加傾向である。国籍別には、中国(71万人)、ベトナム(43万人)、韓国(40万人)、フィリピン(27万人)、ブラジル(20万人)、ネパール(9.7万人)、インドネシア(5.9万人)、米国(5.4万人)、台湾(5.1万人)、タイ(5.0万人)と続く。2017年12月と比較し、全体で256→276万人に増加しており、特にベトナム(20→43万人)の増加率が著しく、ネパール(8.0→9.7万人)が続く。ベトナムはここ10年間では10倍の伸びを示している。

北九州市では、12,769人の外国人が居住しており、ベトナム人(4,311人)、韓国人(2,679人)、中国人(2,524人)の順が多い。

今回の調査でも、主言語としてベトナム語、中国語、英語、韓国語、タガログ語(フィリピンの言語のひとつ)、タイ語、インドネシア語、ネパール語の患者を診療されており、日本の統計と類似していた。スペイン語、南アフリカ語を主言語とする患者への診療もあった。

回答を得た19施設のうち、全ての施設で外国人診療が行われていた。

17施設で外国人診療の際に困ったことがあると回答された。

今回、外国人診療で一般的に困ったこととして、言語コミュニケーションの点が最多であった。

言語コミュニケーションについて、されている工夫としては自動翻訳機やアプリケーションの利用、身振り・手振りや筆談での対応、医療通訳者の利用が多かった。あれば利用した

い理想の言語コミュニケーションサービスとしては、**自動翻訳機やアプリケーションの利用、医療通訳者の利用**が多かった。

外国人が安心して受診できる病院・クリニックとして①多言語による問診票・文書の作成、②多言語・多文化経験をもつ職員の雇用、③多文化対応研修、④医療チームの一員としての医療通訳士の存在が挙げられている。（中村ら；小児科診療. 2019）

また、外国人の受診者が不安に感じる事項として、「コミュニケーションの障壁」「医療システムの違い」「文化・価値観の違い」という面が挙げられており（田中ら；日本小児科学会雑誌. 2018）、医療従事者はこれらに配慮が必要である。

言語コミュニケーションの問題に対する解決策として

- ・医療翻訳機、アプリケーションの利用
- ・医療通訳者の利用
- ・多言語医療問診票

が挙げられる。

医療翻訳機、アプリケーションは多言語に対応しており、医学用語も変換できるようになっている。医療通訳者が利用できない場合や、英語以外を母国語とする外国人診療の際に有用であると考えられる。翻訳機、アプリケーションとも月額での契約となっていることが多く、費用の面は問題である。

医療通訳者の利用については、公益社団法人 北九州国際交流協会において、令和4年現在、**英語、中国語、韓国語**を対象として行われている。ただし、活動時間は1回4時間以内、謝金として1回につき4000円(税別)を支払うなどの制約もある。

多言語医療問診票は無料でダウンロードでき（NPO 法人国際交流ハーティ港南台と公益社団法人かながわ国際交流財団）、産婦人科受診において、初診の際は有用と思われる。中国語、韓国・朝鮮語、タガログ語、ポルトガル語、スペイン語、ベトナム語、英語、タイ語、インドネシア語、カンボジア語、ネパール語、ラオス語、ドイツ語、ロシア語、フランス語、ペルシャ語、アラビア語、クロアチア語、タミル語、シンハラ語、ウクライナ語、ミャンマー語、モンゴル語の **23か国に対応**している。初診時の病歴聴取の際には有用であると考えられる。

産科診療特有の困った事象としては、問診や説明などの際の言語コミュニケーションの次点として、分娩様式の決定が続いた。

経膈分娩や帝王切開など分娩様式は、それぞれ適応、メリット、デメリットがあるため、十分なインフォームドコンセントの後に決定されるべきである。井上らは、日本語によるコミュニケーションが困難なことにより、帝王切開を選択せざるを得なかった事例を報告している。（井上ら，国際保健医療．2006）

今回の産科クリニックでの外国人診療についての調査で、診療の際に困ったことがある施設が多く、言語コミュニケーションの問題が最多であった。産科診療においては、問診や説明の際の言語コミュニケーションで困った施設が最多であった。ベトナム語、中国語をはじめとし、様々な言語に対し、コミュニケーションが困難と感じていた。

医療通訳者の利用、自動翻訳機やアプリケーションについてあれば利用したいとの回答が多かった。

日本語が理解・使用できない外国人診療において、知人や家族で日本語が使用できる方につきそってもらい、それが不可の場合は、身振り手振りや筆談など工夫をしつつ、医療通訳者を利用しやすい環境のための養成や質と量の確保、自動翻訳機やアプリケーションの普及が理想的である。

母子保健・医療を円滑に行うために外国人患者および各施設へのサポートが望まれる。